



怪奇小説 の世界

川崎ゆきお

「あれは何処かで繋がっているのでしょうかなあ」

寺の住職が語る。この人は怪奇小説を好んでいた。つまり、好きなのだ。怖いものが好き。寺を継いだのもそのためだ。長男は普通のサラリーマンで、寺から出た。兄弟でも性格が陰と陽ほど違っていた。

住職と話しているのは怪奇小説家だ。古い言い方だが、今ならホラー作家だろうか。同じようなものを指しているが、時代が違う。

「私は怪奇小説。特に海外の物が好きでしてねえ。それらは翻訳物ですので、言葉遣いが少し違う。日本なら怪談になってしまいます。畳臭い、湿気を含んだような話にね。そうじゃなく、洋館などに出る幽霊が好きなんです。別に出なくても構いませんがね。その雰囲気が好きなんですよ」

「昔の探偵小説のようなものですか」

「そうです。名探偵が出て来て、トリックを見破るようなやつですねえ。しかし、そう言うことじゃなく、言葉遣いなんです。洋館物なら、住んでいる人も紳士淑女が多いでしょ。そういった言葉遣いが好きなんです」

「例えば」

「言葉が丁寧なんです。これで落ち着きます」

「なるほど」

「それよりもさらに好きなのが、何かが出ると言うことです」

「幽霊ですね」

「怪談ですので、当然幽霊でしょうが、異変でもよろしい。ただ、それらは現実にはあり得ないことに限ります。深閑とした森、そこにある古城でも、洋館でも何でもよろしい。張り詰めたような空間がそこにあります。現実ではあり得ないものが忍び寄ってきたり、また、その屋敷に棲み着いている。その気配が、屋敷内に漂う。もうこれだけで良いのです」

「怪奇趣味というやつですか」

「現実の問題じゃなく、あっち側の問題なんです。それと関わる」

「それは空想の世界を楽しむようなものですか」

「夜中、ふと起きて、家の中を少し歩いてご覧なさい。我が家なのですが、少し違う。暗いからです。電気を付ければ戻りますがね。しかし、さっきまで眠っていたので、少しぼんやりとしている。また、この時間起きても用事がない。しかし、起きてしまった。別にすることは無い。ついでにトイレに行くか、水でも飲むか、その程度です。それにすぐにまた蒲団に戻りますからね。しかし、起きていてはいけない時間にいることに、少し不安を感じる。用がないので、つまらんものに目が行く。土産物で買った額入りのお面が飾ってある。そういうのが気になる。薄暗いですから、少し不気味な表情をしています。漏れてくる外光で妙な光線具合になり、表情ができるのです。これは寺に住む私の話ではないですがね」

「はい。じゃ、それは別に怪異でも怪談でもないですね」

「そうです。お面が笑ったりしませんし、そこに悪いものが入ってもいません。ただ、その狭い考え、狭い思いが好きなんですよ」

「具体的には怖がるようなものはないのですね」

「ないです。ただ、昼間の現実を少し離れて、怪しげな空間に入り込みます。そこは張り詰めた世界です」

「怪奇小説が好きなのは、そういう趣を好まれるからですか」

「何かよく分からない。正体が分からない。そういうものを恐れたりする心理がいいのです」

「これは陽の世界ではなく、陰の世界でしてね。忌みの世界でもあるのです。狭い洞穴、覗いてはいけない世界。そこは地獄に繋がっていたりします。そして、そこから得体の知れないものがたまに出てきます」

「はい、分かりました。そういうのを一つ、書いてみます」

「私はあなたのファンでしてねえ。是非読みたいので、お願いします」

「ところで」

「何ですか」

「お寺に幽霊は出ますか。怪異などありませんか」

「ありません」

「あ、はい」

「ただし」

「はい」

「真夜中は別です。眠っているときはね。だから、分からない」

了